平野啓一郎先生インタビュー
二〇一一年十月十四日　ワルシャワ大学図書館にて
聞き手　ミコワイ・メラノヴィッチ教授

Analecta Nipponica 2, 79-83

2012

Artykuł został opracowany do udostępnienia w internecie przez Muzeum Historii Polski w ramach prac podejmowanych na rzecz zapewnienia otwartego, powszechnego i trwałego dostępu do polskiego dorobku naukowego i kulturalnego. Artykuł jest umieszczony w kolekcji cyfrowej bazhum.muzhp.pl, gromadzącej zawartość polskich czasopism humanistycznych i społecznych.

Tekst jest udostępniony do wykorzystania w ramach dozwolonego użytku.

MUZEUM HISTORII POLSKI

INTERVIEV

平野啓一郎先生インタビュー
二〇一一年十月十四日　ワルシャワ大学図書館にて
聞き手　ミコワイ・メラノヴィッチ教授

MM: 本日はインタビューに応じてくださり、誠にありがとうございます。まずは平野先生の最初のご著書「日蝕」の文体に関して、どんなテクストを参照されたのか、またその意図をお聞きしたいと思います。よろしくお願いいたします。

HK: よろしくお願いいたします。文体に関しては、作品やテーマごとに、最もふさわしい文体があると思っています。「日蝕」はラテン語で書かれているという設定ですが、十五世紀末にはパリ大学のような所でも人文主義の影響が少しずつ出始めて、ラテン語が変わってきたと言われていました。僕はその文章を、明治期になって様々な概念が新しく入りながらも古典的なスタイルを守っている、明治時代の文語文の文体で表現するのがいいのではないかと思って、具体的には森鴎外の史伝の文体、「渋江抽斎」から「伊沢蘭軒」ぐらいにかけての頃の文体を念頭に置きながら書いていました。

MM: なぜこのテーマを選ばれたのですか。

HK: 当時はキリスト教社会というものが崩壊しようとしていた時期でした。戦争やペストなどがあって、神が作った世界なのにどうしてこんなに不幸なことが起こるのだと、人々の心の中に疑問が浮かび上がっていました。まだルネサンスにも入らず、新しい価値観によって社会がひとつに結び合うということができずに、むしろ魔女狩りのように敵を見つけて、あるいは悪を見つけて、それに向かい合うことで共同体がもう一度一つになろうとする動きがあの時代にありました。それは九十年代末に日本に生きていた僕にとって、ある意味ではシンパシーを感じるものでした。当時の日本もバブルが崩壊した後、社会が新しい価値観や方向性を見いだせないまま、ものすごく大きな停滞感の中にあったんです。そういう社会にいる中で、当時の中世末期のキリスト教に関する文献を読んで、非常に心を動かされたのがきっかけでした。

MM: それは当時の大学の授業と関連がありましたか。

HK: 大学の授業とは全く関係がありませんでした。ただ僕の大学の恩師は政治思想史の専門家としてハイデガーをずっと研究している先生で、西洋の政治思想史についてはその先生からずっと教わっていたので、そのことは関係していると思います。ウンベルト・エコーの「薔薇の名前」は読んでいたのですが、僕はどちらかというと、ピエール・クロソフスキーというフランス人の作家が書いた「バホメット」、それもやはり中世末期を舞台にしている小説なんですが、そちらの作品の方から強く影響を受けていると思います。

MM: では次に「葬送」についてお伺いしたいのですが、どういうきっかけで、ショパンやドラクロワを登場人物として選ばれたのですか。

HK: もともと僕は子供の時からピアノを習っていて、ショパンの音楽はよく聴いていたのですが、高校生のときに、カジミール・ヴィエールジンスキという人が書いたショパンの伝記を読みました。それがとても面白い伝記で、その伝記はショパンの偽の手紙を資料としてかなり使っているので、いまでは資料的な価値はあまりないと言われていますが、ただ本としてはとても面白い本で、そのなかでドラクロワとの交流も描かれていたんです。それまではショパンの音楽にしか興味がなかったのですが、それを読んでからはショパンという人物にも興味を持つようになりました。また僕はフランス文学が好きで、特にバルザックが好きでしたので、ちょうど同時代ということもあって、ショパンの伝記とバルザックが結びついて、この時代をテーマにしたいと思うようになりました。

MM: それまでにドラクロワの作品はご覧になっていたのですか。

HK: ドラクロワの絵を見たことはあったのですが、それよりも三島由紀夫が若い頃ドラクロワの日記が座右の書だったと言っていまして、三島が読んだ日本語訳のドラクロワの日記は実はあまりよくないんですが、原書で読んでみたらやはりとても面白くて。それまでドラクロワの絵はまあ嫌いじゃないという程度だったのですが、日記を読んでからは、彼に興味を持つようになりました。

MM: なぜショパンがノアンからパリに戻ったその時期だけを選んだのですか。

HK: 近代が大きく動いたひとつのきっかけは、二月革命だったと思うんですね。フランスが大革命の後ブルジョワジーの世界になり、それからもう一度労働者たちが革命を起こすのが二月革命ですが、ショパンは二月革命の翌年の一八四九年に死んでいます。彼がパリに来たのは一八三〇年ですから、七月王政期が始まった時期にぴったり重なっていて、またショパンの死が七月王政期の終わりに重なっている。そこに興味を持ったんです。また彼の最後の日々を描きたかったということもあります。実は、当初はショパンとドラクロワとボードレールの三人の話にしようと思っていたんです。七月王政時代はショパンが主人公で、二月革命後の第二帝政期はボードレールが主人公、その二つの時代を生ききったのがドラクロワと

いうふうに。しかしそれをやると五千枚くらいの小説になってしまうので、誰も読めないんじゃないかと思ってやめましたけれども。

MM: そうすると「葬送」の主人公はやはりショパンと考えていいのでしょうか。

HK: 僕は二人だと思っています。ショパンはあそこで亡くなってしまいますが、ドラクロワはその後生き続けますから。

MM: 明るい印象の結末に対して、物語の始まりは暗いお葬式の描写ですね。

HK:「葬送」というタイトルにも関わりますが、やはりあのとき何かが終わったんじゃないかというのが、最初に小説を書こうとしたとき抱いていた思いなんですね。そしてショパンの死と七月王政期の終わりを重ねながら、ある時代の終わりを描きたかった。それで、彼の晩年に注目したんです。

MM: 演奏会の描写は素晴らしいですね。想像だけではとても書けないと思いました。

HK: 人の死がどうして悲しいのかというのは、その人が生きていた生が惜しいからこそ、亡くなったときに悲しいんだと思うんです。だからショパンが死ぬということの意味を強調するためには、生きていた彼がどんなに素晴らしかったかということを書かないと死の意味は強調できないので、演奏会のシーンで天才ショパンの姿をどうしても描く必要がありました。

MM: ジェーン・スターリングという女性が出てきますが、彼女の存在のおかげで探偵小説の雰囲気が出ていると思います。作者にとって彼女の存在は何だったのでしょうか。

HK: そうですね、ショパンの書簡を通じてジェーン・スターリングという人のことを知りました。しかしショパンはやはり最後までサンドのことを気にしていたと思うんですね。サンドの後、彼女がずっと面倒を見てくれますが、ショパンは最後の方ではだんだん彼女が嫌になってきてしまう。そこはなんと言うか、人間と人間の関わりの物悲しさと言うか、一方がどんなに一生懸命でもどうしようもないということだと思います。

MM:「葬送」での本格小説の語りを構成する準備は、一人でされたのですか。

HK: 資料集めは一人でやりました。当時はまだインターネットもあまり発達していなかったので、ノアンのサンドの別荘に行ってサンドの書簡全集を買ってきたり、そういうことは全部自分でしました。九十年代末ポストモダンの時代に、日本の小説もちょっと行き詰まっていたんですね。小説というのがこの先どうなっていけば